

主 題：偽教師たちに惑わされるな⑤ 彼らをさばかれる主
 聖書箇所：ユダの手紙 12-13節

私たちは失敗から学ぶべきです。しかしそれでいながら悲しい現実というのは、同じ失敗が何度も何度も繰り返されているということです。ユダは教会の中に入り込んできたにせ教師たちはまさに3人の歴史的人物と同じ歩みをしていると言いました。あのカインにしてもバラムにしてもコラにしても、神の祝福の中に置かれていたにもかかわらず、神に背を向け続けることをやめなかった人物です。結局この世の中を見た時に、神を拒み、神に背き続けたことに気づいて神の前に悔い改めをした者たちと継続して神を拒み逆らい続けている者たちとこの2種類の人たちしか存在していません。あなたも私もそのどちらかに属しています。ユダは彼らの失敗から学びなさい、同じことを繰り返してはならないと教えます。罪から離れて神に逆らうことから離れて、神に従う者になりなさいと。どんなことがあっても神様の真理に立つようと、間違った教えに惑わされてはならないのだとユダは教え続けます。

☆ にせ教師たち：自然界からの五つの例え

きょう私たちが見て行く12-13節で、彼らの実態を五つの自然界からの例えを使って説明しています。彼らが一体どういう存在なのか、なぜ彼らが危険なのかをユダは説明します。こういった偽りの教師たちはどの時代でもどの場所でもどの国でも入り込んできます。自分自身の信仰をしっかりと守っていくために、教会を守っていくために彼らがどのような存在なのか、ユダの教えを見ていきましょう。

1. 暗礁 12節

まず一つ目にユダが用いる自然界の例えは「暗礁」です。12節「**彼らは、あなたがたの愛餐のしみです。**」とあります。この中の「しみ」にマークがついていて新改訳聖書の欄外には「あるいは暗礁」と書かれています。つまり海中に隠れていて見えない岩のことです。この「しみ」というのは簡単に言うと「汚れ」です。このにせ教師たちが入り込んできて教会の中に間違った教えをもたらしてきたのです。その彼らの悪影響というのは、教会のクリスチャンたちが楽しんでいた「愛餐」にまで及んでいるのだと言うのです。この当時の人々も礼拝が終わった後、ちょうど私たちがしているように食事をともにしていたのです。礼拝でみことばを学び、聖餐式を行い、そして食事会、「愛餐」の時間を持っていました。「愛餐」と言うぐらいですからただの食事会ではなかった。まさにキリストの愛を実践する時間だったのです。

1) 内側と外側から来る汚れ

この「愛餐」について考える前に、まず「しみ」について考えていきます。新改訳聖書で「しみ」と訳されている箇所は3カ所あります。一つはユダ12節。あと2カ所はユダと同じギリシャ語ではないのですが、日本語では「しみ」と訳されています。一つはエペソ5章、もう一つは2ペテロ2章に出てきます。どういう意味でこのことばが使われているのかを知るために一番いいのはその箇所を実際に見てみることなので、エペソ5:27を見てください。「**ご自身で、しみや、しわや、そのようなものの何一つない、聖く傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせるためです。**」とあります。もちろんこの「しみ」、「しわ」というのは比喩的に記されています。パウロはこの箇所では我々信仰者を罪から完全にきよめてくださる時がやって来るのだという話をしました。確かに今私たちは罪赦されました。でも実際の生活では罪との闘いを日々経験しています。こういったものから完全に解放される、その時が来るのだとパウロは教えるのです。私たちが待望している、その日です。

ここで「しみ」、「しわ」と言われているのは、簡単に言えば「しみ」というのは外側から、「しわ」というのは内側から来る汚れのことです。あくまでこれは比喩的に使っています。というのは悲しいことに我々の内側——この罪の性質から罪の思いが出てくることを我々は日々経験しているはずで、同時に内側からだけではなく、外側——この汚れた世は私たちに道徳的に汚れた生き方へと誘惑し続けています。そういった罪から完全に解放される日が来るまで私たちは地上にいて、この罪との葛藤を日々経験しています。ですから、パウロはこの箇所では、確かにあなたは義とされ、罪赦されたけれども、今この地上にあってその罪から出てくる内側からの汚れた思い、そして外側からの罪の誘惑があることを「しみ」、「しわ」ということばで表しています。

2) 神に背いた生活

もう1カ所、2ペテロ2:13に「**彼らは不義の報いとして損害を受けるのです。彼らは屋のうちから飲み騒ぐことを楽しみと考えています。彼らは、しみや傷のようなもので、**」とあります。ペテロはこのような人たちのことも「しみ」また「傷」ということばで表しています。わいせつなこと、特に異性の情欲をそそる様を言っているのですが、こういう挑発的なことを行っていた人々のことを「しみ」ということばでペテ

口は表したのです。この人々は酒や不品行、不道德にふけた放蕩の生活を行っていた。しかもそれを隠すことなく、昼間から堂々で行っていた。そこでペテロは彼らはまさに「しみ」であって、汚れた者であると表しているのです。「傷」というのは欠点、正しくないものです。まさに彼らは教会の中で大きな問題を起こしていたのです。実際にこの人たちの行いがこの後書かれています。「あなたがたといっしょに宴席に連なるときに自分たちのだましごとを楽しんでいるのです」、つまり礼拝が終わった後、教会の人たちがともに楽しんだ「愛餐」の場に彼らが参加している様子が書かれています。彼らがその「愛餐」に参加した目的はだますこと、そこに集っている人々に悪影響を及ぼすことでした。ですから「自分たちのだましごとを楽しんでいる」と書いてあります。この人たちは自分たちが神の教えに背いた快樂の生き方を公に楽しんでいただけではなくそういった生き方をもって、そこにいる人々を惑わしてひとりでも多くの人たちを自分たちと同じ歩みに引っ張り込もうとしていたのです。ペテロはこの手紙でそう警告を発したのです。

3) 利己的

ユダに戻ってみてください。ユダが教えてくれることも12節にあるように、「あなたがたの愛餐のしみ」であると言っています。ここでもこの偽りの教師たちは「愛餐」の時にも悪影響を及ぼしていたのです。続いてこう書いてあります。「恐れげもなくともに宴を張りますが、自分だけを養っている者であり」と。彼らは自分たちの犯している罪に対して全く恐れを抱いていないということです。本来ならこの「愛餐」の時というのは信仰者が互いの信仰を高め合う時間でした。身分や財産のあるなしに関係なく、すべての信者が互いにその必要を満たし合っていた。まさにキリストの愛を実践する時間だったのです。だから「愛餐」と呼んだのです。イエス様によって受けた愛を、救いにあずかった信仰者が実際に形として表す時でした。

ところが、このにせ教師たちは「愛餐のしみ」だった。「愛餐」の本来の目的を彼らは台無しにし、その目的を汚していたのです。キリストの愛を実践するということはそこに集っている人たちが本当に神の恵みを覚えてひとりひとりが感謝し、それぞれがそれにどうこたえていくのか、そうして信仰を高め合い、食事をもって神を崇めていく、本来ならばそういう集まりであるはずでした。しかし、恐らく彼らはいろいろな批判をするのです。その群れのリーダーであったかもしれないし、個人的にだれかのこと、何でもいいですが、そういったものを批判したり、非難したりする。なぜそう言い切れるかということ、彼らは「自分だけを養っている者」だとあります。この人たちは全く利己的な者たちでした。ほかの人のことはどうでもよかったのです。自分のことしか考えない、そういう人たちが集まったらどうなります？人間というのは罪深いもので一番愛する自分が誰かに傷つけられたら間違いなくそれに対してリベンジしようとし、言われたら何かを言い返そうとします。ありがたくないと思うことを誰かにされたら、その人に倍返ししようとし、悲しいことに私たちはそれほど罪深い存在です。本来ならこの「愛餐」は、神のすばらしさが現され、それぞれの信仰を高め合う場であるのに、この人たちがやっていたことはそれに全く反することでした。まさにあのコリントの教会と同じようなことがなされていたのです。コリントの教会の問題は、人々がキリストの愛を実践するどころか自分たちのことしか考えていないということでした。1コリント11:20-21の中に「そういうわけで、あなたがたはいっしょに集まっても、それは主の晩餐を食べるためではありません。食事のとき、めいめい我先にと自分の食事を済ませるので、空腹な者もおれば、酔っている者もいるというしまつです。」とあります。豊かな人もいたし、そうでない人もいたのです。みんなが食べ物を持ち寄って神の恵みを感謝して、祝福を分かち合っていたのです。ところがある裕福な者たちは自分たちのことしか考えないで、自分たちが持って来たものは自分たちだけが食べる。その集まりの中である一角にそういう人々が陣取ってほかの人々のことを全く考えもしなで自分たちだけが楽しんでた。こういう利己的な教会へと、キリストの愛を実践するべきところが全くそうではない集まりとなったのです。「自分だけを養」い、自分のことしか考えないと。

私たちがいろいろな集まりを持つ時に考えなければいけないのは、その集まりによってあなたが何を
得るかではなくて、あなたが何を提供するかです。というのは私たちの責任はあなたではなくて周りに
いる人々の信仰をどのように成長させるのかです。もし信仰者がどんな規模であったとしても集まった
時に、我々が自分のことよりもその人たちの信仰の成長を考え始めたら、その集まりを神がお喜びにな
ることは容易に想像できます。この問題のあった人々というのは人から自分に目を向けさせようとする
のです。自分に何をしてくれるの？自分をどう扱ってくれるの？と。ですからユダやペテロが教えたこ
とは、我々が考えなければいけないのはあなたのことよりも周りにいる人々のことだと。

どうしてここの「しみ」が暗礁と訳せるのか、その意味がわかりましたか？暗礁というのは、船が航行
していくためには最も注意しなければならないものの一つです。でなければ座礁してしまうからです。
船長や航海士は間違いなく細心の注意を払います。恐らくユダはこういう人々が教会の中に入り込んで
きて、みことばに相反することを教えてしまう大変危険な存在、まさに海に浮かんでいる岩のように、船

をだめにしてしまう暗礁のような存在だということを教えようとするのです。だから教会の人たちひとりひとりがしっかりと目を覚まして、そういったものに惑わされないように、どんな教えを聞いた時でもどんなことを読んだ時でも、本当にそれが聖書が教えていることかどうかをあなた自身が吟味する責任があるのです。

2. 水のない雲

二つ目に「水のない雲」という例えが語られています。12節「風に吹き飛ばされる、水のない雲」とあります。二つのことを教えています。

1) 風に吹き飛ばされる

まずこの「風に吹き飛ばされる」というのは、誤った教えで人々を惑わすということです。というのはこの「吹き飛ばされる」ということばは、「正しい道から運び去る」とか「正しい道からそらす」という意味です。正しい道を歩んでいかにないように、その道からそれるように、これがこのことばの意味です。そういった悪の働き人が多く現れて来ることをみことばは警告しています。弟子たちがイエス様に世の終わりにまつわる兆候を尋ねました。その時イエス様がどのようにお答えになったかということ、マタイ24:4-5「人に惑わされないように気をつけなさい。わたしの名を名のる者が大ぜい現われ、『私こそキリストだ。』と言って、多くの人を惑わすでしょう。」と言われました。マルコ13:5にも出てきます。惑わす者がたくさん出てくるから惑わされてはいけなさと。ルカ21:8でイエス様は「惑わされないように気をつけなさい。わたしの名を名のる者が大ぜい現われ、『私がそれだ。』とか『時は近づいた。』とか言います。そんな人々のあとについて行ってはなりません。」と警告された。ヘブルの著者もヘブル13:9で「さまざまの異なった教えによって迷わされてはなりません。」と言います。またパウロもエペソ4:14で「私たちがもはや、子どもではなくて、人の悪巧みや、人を欺く悪賢い策略により、教えの風に吹き回されたり、波にもてあそばれたりすることがなく、」と言っています。つまりいろいろな教えが入ってきて混乱させられる。そういうものに惑わされないよう、そういうもので混乱してはいけないのだと。どうしたらいいかということ、しっかりとみことばに立つことです。

2) 水のない雲

次に「水のない雲」とあります。この人々は口先だけの約束をする者たちです。有言不実行な者たちです。この「水のない雲」というのは乾いているという話です。雲がやって来ると、雨が降ります。最近では携帯でレーダーを見ることが出来ます。雲が近づいてくると雨が降るとみんな思います。特に農夫たちにとっては秋の雨と春の雨は重大でしたから雲がやって来ると雨が降ると期待しました。でもこの雲には水がなくて渴いていると言うのです。この教師たちは人々が関心を払うような魅力ある祝福を約束するのです。あたかも雲が来ると雨が降るということを期待させるように、この人たちは人々にある種の期待をもたらすのです。例えば病気の人であれば病気が癒されることを約束し、社会人であれば社会における成功や繁栄を約束する。自分の夢が実現することを約束したり、そういったいろいろなことを彼らは約束しました。恐らく人々が関心を持っていること、今悩んでいることを知っていた彼らはそういうことが実現するのだという偽りの保証を人々にもたらしたのです。しかし、そういうことを約束していても、彼らにはそんな権限も能力も与えていないから、それらを与えることができない。今でも多くの人たちが例えば癒しの賜物があると言います。もしそうだとしたら、癒しを必要としている人が世界じゅうに山ほどいますから、そこへ行くべきです。そしてそれを治してあげるべきです。そういったことができないのは、それが本当に神が教えている真実に基づいているのかどうか我々は考えなければいけない。この当ても確かにいろいろなことを約束して、いろいろなことを言う人たちがいた。でも悲しいことにそれは乾燥した雲だと。

ペテロはこういう人たちに対して「水のない泉」とか「突風に吹き払われる霧」という表現を2ペテロ2:17でしています。また箴言25:14でソロモンは「贈りもしない贈り物を自慢する者は、雨を降らせない雲や風のようなものだ。」と言っています。そんなことできないのに、まさにそれは雨を降らせない雲や風のようなのだと。口でどんなに立派なことを言っても、どんなに大きなことを言っても、彼らにはそれを実現することはできないと。悲しいことにこういったものにだまされている人たちは、どの時代にも、そしてあらゆる国に存在しています。なぜなら私たちの周りの宗教と名のつくものはみんなそういうものを約束しません？これを信じたらあなたはこうなりますよと。病気にかからないとか、病気が治るとか、豊作を経験するとか、みんな聞きたいことを保証してくれるのです。教会でもそういったことを約束する偽りの教師たちがいっぱいいるのです。私たちが学ばなければいけないのは、私たちの欲しい物を得たからといって私たちが求めている本当の幸せを得ることは決してないということです。本当の幸せというのは神のみこころに従う時に神が下さるものです。私たちがそのことに気づかなければいけないのです。なぜなら我々は自分の好きなように生きてきたはずで、その人生が私たちにもたらしたものです。我々に必要な物は何かを知っているのは神です。その神が必要を与えると云われた。それを信じることです。私

たちの心を本当に満たしてくださるのは神です。その約束を信じてその方に従うことです。でも私たちのどこかにこれさえ手にすれば、これを手に入れたら、こういう成功を得たら、きっと今よりも幸せになるに違いない、今よりきっと満足を得るに違いない。サタンは巧妙です。そうやってみこころでは不十分で、あなたの欲しい物を手にしなければならぬとだますのです。本当の満足は神だけが与えます。我々はそのことをしっかりと学ぶことです。

しかも感謝なことあなたにそれはひとりで抱える必要はない。我々は神のもとにすべて持っていくことができる。そして私たちは正しい神、最善をご存じである神が、最善を行える神が、それをなしてくださることを信じていることができる。私たちはそういう歩みができる人へと生まれ変わったのです。主のみこころだけがあなたにとっても私にとっても最善だということです。そして主のみこころだけが神の栄光を現す道です。だから私たちはどんなことを神の前に願っても、みこころを求めていると言うのは、それが最善だということを知っているからです。そこにしっかりと立つことです。

3. 実を結ばない秋の木

1) 御霊の実を結ばない木

12節後半「枯れに枯れて、根こそぎにされた秋の木」とあります。三つ目は実を結ばない秋の木です。この「実を結ばない」ということばは、果実のない、実が成っていないということです。「秋」という特定のシーズンを明示しているのは、「秋」は収穫の時だからです。本当は秋になると、木は実を実らせているはずで、ところがこの木は実が成っていないのです。この偽りの教師たちは立派なことを話し、見た目は信仰者で非常に霊的でした。でも悲しいことに彼らの生活に御霊の実がないということです。救われているかどうかというのは、どれだけの知識を持っているかによってではなく、持っている知識がその人のうちで生きていくかどうかによって知ることができる。大切なことはどれだけのことを知るかではないのです。あなたが知った知識があなたの中で生きていくかどうかです。なぜなら聖書のことを知っている人たちはたくさんいます。サタンでさえも神はひとりだと信じている。でもそこには救いはないのです。我々信仰者が考えなければいけないのは、神のおことばが自分の中で生きていくかどうかです。そうだったら、あなたは確実に御霊の実を実らせているからです。

イエス様がマタイ7：15で「にせ預言者たちに気をつけなさい。彼らは羊のなりをしてやって来るが、うちは貪欲な狼です。」と言われました。見た目だけではわからないということです。見た目は羊のようでも実は狼なのだ。まさに今私たちが見ているにせ教師たちもそうです。そこで16-17節で「あなたがたは、実によって彼らを見分けることができます。ぶどうは、いばらからは取れないし、いちじくは、あざみから取れるわけがないでしょう。同様に、良い木はみな良い実を結ぶが、悪い木は悪い実を結びます。」、20節では「こういうわけで、あなたがたは、実によって彼らを見分けることができます。」と言われました。イエス様が言われたことは実を見たらこの人が本当に良い木なのか悪い木なのかがわかると。その人がどんなことを行っているのか、どんな人物なのか、それを見ることによってその人が良い木なのか悪い木なのかがわかると。

2) 天の父が植えられなかった木

ユダの手紙を見ると、「枯れに枯れて、根こそぎにされた秋の木」と書いてあります。「枯れに枯れて」というのは、「二度死んだ」という意味です。ギリシャ語の辞典を見ると木が枯れて種が腐って死ぬと書いてあります。木が枯れるだけではなく種も腐ってみんな死んでしまっている。まさに二度死んだというのが「枯れに枯れて」ということばの意味です。もう一つ「根こそぎ」とあります。これは根がそのままそっくり抜かれてしまっているということです。木自体も枯れているし、種も死んでいるし、そして根っこごと引き抜かれている状態。死んでいるから実を結ばないと言っているのです。イエス様がマタイ15：13で非常におもしろいことを言われています。「わたしの天の父がお植えにならなかった木は、みな根こそぎにされます。」と。イエス様は非常に大切なことを言われました。ということは「天の父」が植えた木と植えなかった木があるということです。「天の父」が植えなかった木はみんな根こそぎにされ、その後さばきにあうのです。なぜかという、「天の父」が植えたのでなければ、良い実を実らせないからです。救いというのは私たちが一生懸命努力をして救われるのではないのです。神の一方的な恵みによって私たちは救われたのです。神が私たちに生まれ変わらせてくださった。神が私たちに救ってくださったゆえに、神が私たちを通して働いていかれる。我々クリスチャンは確かに天国の切符をもらったのです。でも我々が地上にいるのは、我々を通して神ご自身がどういうお方であることを明らかに示すためです。この世の人々に神とはどんな方なのか、イエス様とはどんなお方なのかを明らかに示すために神は救った私たちに地上に置いてくださっている。そして聖霊を下されたのは聖霊が働いて日々私たちにイエス・キリストに似た者に変えていくことによって、イエス様がどんなお方なのかを明らかにするためです。神によって植わった良い木というのは、このような働きをするのです。生きています。イエス様がどんなお方なのかを世に証して行くのです。そのことをあなたがしっかりと覚えている

かどうかです。

どうしたらそれができるのかというと、それはあなたが神のことばに従うことです。神様がこうなさいと言うのにできませんと言うような不信仰な信仰ならば、残念ながら神はあなたを通して働くことができないのです。神は働こうとしているのにあなたがそれをとどめるからです。そういう不信仰をやめなければいけない。神はあなたを使ってくくださるのです。この地上において神はこんな私たちを使ってくくださるのです。神の偉大さを世に証するために、神の救いのすばらしさを私たち自身が明らかにするために。あなたを救い、私たちをこうして生かしてくださっている。神があなたを救ってくださったのだったらそのすばらしい神様を明らかにすることです。あなたが神のみことばに従うなら、もちろん神の助けをいただきながら、神様はあなたを変えていってください。そして我々自身はそんなに変わったように思われなくても、自分はいかんなあ、変わってないと思う、そんな中でも、確実に神はあなたを使って神ご自身を明らかにしてくくださる。それが神の下さる救いなのです。神の植えた木というのは、そういう特徴があるのです。ですからここに書かれてあるように、この木は確かに木であっても、枯れに枯れている、二度死んでいる。しかも根っこも引き抜かれてしまって完全に死んでいるから実を实らせることはあり得ない。イエス様は「良い実を結ばない木は、みな切り倒されて、火に投げ込まれます。」(マタイ3:10)とされています。皆さん、良い実を实らせているのかいないのか、我々が考えなければいけないのはそのことです。

◎ 神のことばが心の中に生きている人

不安を持っていただきたくない。そのために、では神のことばがあなたの中で生きているというのはどういうことか簡単に言うとういうことです。あなたは救われたことによって新しい願いを持ちました。どんな願いかというと、私は神に喜ばれたいという願いです。私は神様を喜ばせていきたい、神のおことばに従っていきたい、神のすばらしさを人々に知ってもらいたい、こういった思いを神はあなたに下された。その思いがあなたの中で生き生きとしている時はそれが形となって出てくるのです。でも形になる前にそれがあなたの心の中になければ、そういった歩みをしたと願いません。あなたが神を信じて神とともに生きることによって少しずつそのような人に変わっていきますけれども、今お話しているように神のおことばがあなたの心の中で生きている人というのは、そういった神が下さる思いがあなたの心の中にあり、それがあなたの歩みの原動力になっているのです。

枯れた人々、木が枯れている人たち、つまりいのちのない木というのはそんな思いがないということです。知識はあるかもしれないけれども、そういう願いや神を喜ばせていきたいという思いがない。神の栄光のために生きたいという思いもない。多分楽しく思いどおりに生きています。このにせ教師たちというのは枯れた木でした。立派なことは言っている。知識は持っているかもしれない。でもその知識、神のことばは彼らの中で生きていなかった。そういう存在だったのです。

4. 海の荒波

四つ目は13節「海の荒波」という例えを使っています。「自分の恥のあわをわき立たせる海の荒波」と書いてあります。これは自分自身の恥ずべき行為ということです。「あわをわき立たせる」ということばが表しているのは、荒れ狂った嵐の海です。このみことばを読んだ時に二つのことを思いました。

1) 波の花

皆さん波の花というのを聞いたことがあるかもしれません。これは冬場の日本海側でしか見ることはできないのですが、海中に漂う植物性プランクトンに含まれる粘液が海の波にもまれて石鹸状の泡を作っていくのです。私も何回か見たことがありますけれども、最初は大体白いのですが、時間がたつにつれて黄色に変色していきます。その泡をすくってみたって別に何の価値もないのです。また海の泡というのがあります。これは日本だけではなくてほかの国でもあるのですが、これも海の不純物が混ざり合っているのだらうと言われていました。同じようなものです。ちょうど石鹸のような泡が立つ。でも何の価値もないと。まさにこのにせ教師たちは、立派なことを約束しているけれども、全く価値がない。彼らの働きも価値のないものだ。

2) 打ち上げられたゴミ

もう一つこの四番目の例えでユダは、打ち上げられたゴミの話をしているのかもしれませんが。「海の荒波」と言っているのは、嵐が過ぎ去った後、台風の後の海岸に行ってみると、いっぱいゴミが散乱しています。光景を見ても余りきれいなものではありません。まさにそれがこの偽善者たちのすることであると。彼らがすることもこのゴミと同じように醜く汚れたものである。このゴミのようににせ教師たちの歩みももたらしたものは数々の恥ずべき行為である。どんな行為を彼らがしてきたのかというと、もちろんその行為は入る前から行われているのですが、彼らは偽善者であり、教会の中に入り込んで来て神の教え、真理を曲解し、快樂のままに生きています。そして人々に実現不可能なことを約束し、そして人々を救いから、また神の祝福から遠ざける者たちです。まさにゴミです。何の役にも立たない存在

だと。イザヤもイザヤ57：20で同じことを言っています。「悪者どもは、荒れ狂う海のように。静まる
ことができず、水が海草と泥を吐き出すからである」と。立派なことを教えていたこのにせ教師たちが教会
の人々の前に残した傷跡は大変なものでした。そういう存在だとユダは警告を与えるのです。

5. さまよう星

五番目には「さまよう星です」と出てきます。これは隕石、流れ星、彗星です。突然発生してあつと
言う間に消えてしまうものです。どこから来てどこに行くのか誰もわかりません。今見えたと思ったら
次の瞬間に消えています。光るのは一瞬だけでその光は長く続きません。このにせ教師たちもすばらし
いことを約束しても輝くのは同じように一瞬だけですぐに消えてしまう。ですから暗闇の中にいる人々
を真理の道へと導くことはできない。クリスチャンのことを「星」と言われているのをご存じですか？
クリスチャンであるあなたのことを聖書は「星」と呼んでいます。ピリピ2：16に「彼らの間で世の光
として輝くためです。」とあります。この「世の光」の「光」という名詞は「光」という意味とともに
「星」という意味もあります。ですから、「世の光」、世にある光、また星と訳せるのです。ということ
は、救いにあずかった私たちは人々を導いていく星である、世の光であると。光というものが輝いてい
る時にはどの道を歩んだらいいのかがわかります。私たちの役割というのは暗闇の中において、何が真理
かわからない世の人たちに真理を明らかにすることです。皆さんは世の光、星なのです。私たちはそう
いった務めをいただいています。神の真理を明らかにし、暗闇の中にいる人たちを正しい神のもとへ導
いて行こうとするのです。

1) 暗闇を歩む人たち

でもこのにせ教師たちはどうだったかという、全くそういった働きはしていません。彼らは正しく
導くことができないのです。なぜなら彼ら自身も暗闇の中にいるからです。彼らがすることは、自分た
ちだけが暗闇の道を歩んでいるのではない、彼らは人々をそこに導き入れようとしているのです。こ
ういう人々が教会の中に入り込んで来て、真理を根本から曲げ、快樂のまま生きる生き方こそが神の前に
正しいのだと誤った模範をもって、神の真理と全く相反することを教える。しかも人々が真理から反れ
ていくように働き、彼ら自身のうちには全く実がない、死んだ状態であり、そして彼らのやっているこ
とは神の前に全く価値のないことであり、むだなことであり、そして誰も導くことができない「さまよ
う星」なのです。

2) 光である神様から引き離された者

こうして彼らのことを明らかにしたユダは、最後にこう書いています。「まっ暗なやみが、彼らのために
永遠に用意されています。」と。ペテロも2ペテロ2：17で同じことを言っています。「彼らに用意され
ているものは、まっ暗なやみです。」と。彼らに約束されているのは「まっ暗なやみ」、暗やみの中の暗いと
ころだと。直訳するとそういう意味になります。地獄のことです。13節に「まっ暗なやみが、彼らのた
めに永遠に用意されています。」という表現を使っていますが、光である神様から永遠に離されたら光を
見ることがない。ですから光である神と永遠をともに過ごさない者はやみの中を神の敵たちとともに永
遠を過ごすことになるのです。その場所に関してイエス様がこう言われています。マタイ25：41

「のろわれた者ども。わたしから離れて、悪魔とその使いたちのために用意された永遠の火にはいれ。」と。悪
魔と悪霊たちに用意されているところは永遠の地獄です。光である神とともに歩まない者たち、そして
やみであるサタンたちとともに生きている者は運命をともにします。しかもおもしろいのは13節で
「用意されている」と、完了形の動詞を使っています。つまりこのさばきはもう既に定まっていると言
うのです。こういうことが起こるかどうかの話ではないのです。こういうことは必ず起こると言ってい
ます。もう定まっている。これがユダのメッセージです。

途中でも触れたように、私たちひとりひとりの責任は、それがどんな方であろうと、聞いている話
が、見ている話が、読んでも話が本当に神のことばに沿ったものかどうか、真理なのかどうかをしっか
りと吟味することです。それをどうか心に刻んでください。あなたの責任はそこです。もしあなたがそ
れをしているならば、どんな教えが入ってきてもあなたは惑わされることはない。なぜ惑わされること
が悲劇なのかというと、神が喜ばれないことをすることは悲劇です。神を悲しませることは我々にとっ
て最も悲しいことではないですか？そういう歩みにあなたを誘惑する者からあなた自身が自分自身を守
っていかなければいけない。目を覚まして本当にこれが聖書の教えなのかどうかを吟味することです。
その責任があなたにあることをしっかり覚えてください。そしてその責任を負っている者たちがこうし
て集まっているのです。一緒にみことばを開きながら、それが本当に神が教えておられることなのかを
吟味して、そしてその真理に従うことです。神の助けをいただきながら。その時に神が喜ばれ、神の栄
光を現す者として主が私たちを使ってください。そんな人生を歩み続けることです。そんな人生を最後
まで走り切っていくことです。